

ページの向こう側

沖縄県立読谷高等学校三年 松本 帆未

歴史の教科書、百五十ページ。
「第二次世界大戦の開始」
その見出しを、
私は静かな教室で読んでいる。
何事もない、いつもの一時間。
笑い声が聞こえる、変わらない日常。
明日が来ることを、疑いもしない。
—— 本当に、それだけなのか。
ページをめくる。
文字は並んでいる。
でも、その向こう側は見えていない。

あの日思い出す。
あの日、訪れた。
沖縄県平和祈念資料館。
目をそらした。
それでも、焼きついた。
並べられた遺品。
残された写真。
再現された壕の暗さ。
ここで、生きていた。
ここで、途切れた。
信じたくなかった。
それでも、消えなかった。

後ろから、聞こえた。
「気持ち悪い」
「自分には関係ない」
その言葉が、耳に残った。
何も言えなかった。
違和感だけが残った。
消えなかった。
どうして、そんな言葉が出るのだろう。
そのとき、ふと思った。
私もまた、
同じだったのかもしれない。

まだ沖縄に来る前。
六月二十三日。
テレビの向こうで、
自分と変わらない歳の誰かが、
平和の詩を読んでいた。
その日、私は、
ランドセルを背負っていた。
「沖縄って休みなんだ」
少しうらやましいと思っていた。
—— あの日までは。

教科書で学んだ。
話も聞いた。
それだけで、
分かった気になっていた。
本当の恐ろしさも、
本当の苦しさも、
きつと触れていなかった。
六月二十三日が近づく。
考えずにはいられなかった。
平和とは、何だろう。
ただ、戦争がないことなのか。

目をそらさないこと。
想像しようとする。
それでも、分かろうとすること。
「戦争を憎み、人は憎まず」
その言葉を、何度も思い返す。
刻まれている。
石に、たくさん名前が。
立場も、国も違う人たちの名前が。
そこには、
憎しみを越えようとした思いがあった。
だからこそ、今があるのだと思う。

ページをめくる。
百五十五ページ。
「戦争の終結」
たった数ページ。
でも、終わっていないものがある。
消えていないものがある。
忘れられない。
あの言葉も。
あの違和感も。
あの日見た現実も。
私は伝える。
小さな声でもいい。
つないでいく。
この思いを。
この命の重さを。
これから生まれてくる人たちへ。
これは、バトンなのだと思う。
あの日を生きた人たちから、
渡されたもの。
手放したくない。
二度と、同じことを
繰り返さないために。